鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文科学・社会科学編 第6号 2023

「スタートカリキュラム」を活用した小学校入学時の指導と効果
―教育委員会の関与による効果と実践事例の検証を通して―

伊東　直人[1]　大垣内　亜紀[2]

要旨

幼児教育と小学校教育の学びを円滑に接続するためのスタートカリキュラムの編成及びそれを活用した小学校入学時の指導と効果について，次の3点の検証を行う．

①教育委員会の関与の有無によるスタートカリキュラムの編成及び理解の進捗.

②スタートカリキュラムに基づく指導による児童の生活や学習における安心感.

③スタートカリキュラムに基づく指導による学びの改善.

これらの検証にあたって，2つの方法を行った．1つは教育委員会が関与してカリキュラム編成を行う自治体（A市）と学校独自で編成行う自治体（B市）との比較である．1つはA市の小学校におけるスタートカリキュラムに基づく実践事例の収集である．この研究を通して次のことが検証できた．1つは教育委員会が編成に関与している自治体の方が指導についての計画性，検証改善による持続性や発展性が高まることである．1つは，接続期のカリキュラムとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を中心にアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを結合させることで，幼保小の連携や相互理解が進み，それが実践に結び付き児童の安心感や学びの連続性につながることである．

キーワード　幼小接続　スタートカリキュラム　アプローチカリキュラム　小学校教育　　入学時の指導

1.　研究の背景

幼児教育と小学校教育とを結ぶ接続期において発達や学びを円滑にすることは，途切れのない連続した学びを保障するうえで重要である．令和４年３月に文部科学省から「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)」[1)]が出され，５歳児と小学校１年生を架け橋期として有効なカリキュラムの導入が求められるようになった．

学校現場においては，平成 20 年小学校学習指導要領改訂以降生活科においてスタートカリキュラムの導入が進められてきている．平成 29 年小学校学習指導要領ではさらにスタートカリキュラムに関して幅広い記述がなされ，また，幼稚園教育要領等では「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」が示され，「幼稚園等と小学校の教員が持つ５歳児修了時の姿が共有化されることにより，幼児教育と小学校教育との接続の一層の強化が図られることが期待できる」[2)]として，幼保小接続の要とされた．

スタートカリキュラムについては「小学校に入学した児童が安心して自信を持って成長し，自立への基礎の形成につながることが期待され」，「校区内の幼稚園，保育所等と連携し，子供の育ちの現状，育成を目指す資質・能力等についてのイメージを共有し，共に考えていくことが必要である」[2)]として，組織的に作成・運用することが求められている．

こうした状況において，今後「幼保小架け橋プログラム」の推進も相まって，スタートカリキュラムの編成がこれまでなされてこなかった自治体においても，編成に向けた動きは加速するものと考えられる．

三重県においては，三重県教育委員会が平成30年3月（令和2年3月改訂）に「三重県保幼小の円滑な接続のための手引き」[3)]を作成し，幼児教育と小学校教育の円滑な接続を進める4つのポイントを挙げ，中でもカリキュラムに関しては，ポイント3で「円滑な接続を意識してカリキュラムを作成する」，ポイント4で「カリキュラムをもとに保育・教育活動，幼児児童の交流を

1　鈴鹿大学こども教育学部教授　2　A 市教育委員会事務局学校教育課指導主事

進めるとともに，見直し，引き継ぎを行う」と示している．さらに，「自立の芽生え」「まなぶ力」「豊かな心」の3領域に10項目の接続のための視点を示し，それぞれに幼児教育と小学校教育をつなぐ接続期のカリキュラムを例示している．

このように，国・地方レベルにおいて幼児教育と小学校教育との接続が加速されてきている．

2. 研究の方向

小学校入学後のスタートカリキュラムは，小学校学習指導要領解説総則編で「児童や学校，地域の実情を踏まえて編成し」とあるように，各学校が教育課程全体の中で編成するものであり，必ずしも教育委員会が主導して行うものではない．しかし，編成に対して教育委員会が指導・助言しながら，各学校のスタートカリキュラムの作成を推進している自治体がある．

接続期のカリキュラムを5歳児と小学校1年生をつなぐものととらえたとき，スタートカリキュラムが単独で意味を成すものではない．アプローチカリキュラム（就学前の幼児が円滑に小学校生活や学習へ適応し幼児期の学びが小学校生活や学習で生かされるよう工夫された5歳児のカリキュラム）と接続をすることで，接続期のカリキュラムとして意味を成すものである．この２つが一体となって幼児教育・保育と小学校教育をつなぐ役目を果たしている．所管の違う公立・私立の幼稚園・保育所・認定こども園と小学校との接続を円滑に進めるためには，教育委員会が指導・助言し，接続期のカリキュラムの作成に関与していくことが必要であると考える．

そこで，本稿では，次章に挙げる仮説による検証を進めるために，平成31年度から教育委員会が関与して，市全体でアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの編成を推進しているA市を取り上げる．併せて，B市を取り上げる．B市は，平成18年の市町村合併後の平成18年度から市として5歳児のカリキュラムを編成してきたが，小学校におけるスタートカリキュラムは各学校が独自に編成しており，アプローチカリキュラムとの接続にまでは至っていない．そのため，令和4年度から接続期のカリキュラムとしてアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを教育委員会が関与し，検討・編成していこうとしている．このA市とB市における小学校の取組状況を比較する．

さらに，教育委員会の指導・助言のもと，幼児教育と小学校教育の接続の取組が進められているA市の実践事例を取り上げ，「小学校における『スタートカリキュラム』の活用と効果」について，検証を試みる．

本研究ではスタートカリキュラムを，現行の小学校学習指導要領を踏まえ，「小学校の入学当初，幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれてきたことが，各教科等における学習に円滑に接続されるよう，児童や学校，地域の実情を踏まえて編成されたカリキュラム」とする．

3. 研究の仮説

以下の点を仮説として挙げ検証軸とする．

仮説1　教育委員会が指導助言などの関与をすることで，自治体全体としてスタートカリキュラムの編成及び理解がより進む．

仮説2　スタートカリキュラムを編成しそれに基づいた指導を展開することで，児童は安心感の中で落ち着いた生活や学習ができる．

仮説3　スタートカリキュラムを編成しそれに基づいた指導を展開することで，幼保小の学びの連続性を踏まえた指導方法の改善が行われる．

4. 研究の内容

仮説の検証を行うために，①教育委員会の関与の有無によるスタートカリキュラムの編成と指導状況の比較，②教育委員会の関与がある市における特徴的な実践事例の分析を行う．

4.1. スタートカリキュラムの編成と指導にかかる調査

スタートカリキュラムの編成と指導の状況について，調査を行う．調査対象は，平成31年度から教育委員会が指導助言を行いながらスタートカリキュラムの作成を進めてきた三重県A市と今後作成を進めていく予定の三重県B市の小学校とする．

4.1.1. 調査方法及び倫理的配慮

調査質問用紙を A 市及び B 市の教育委員会を通じて各小学校に送付し，教育委員会を通じてデータを収集する．本調査に関しては，市名，学校名等は示さない．収集したデータは，厳重に保管し，研究目的以外では使用しないこと等の倫理的配慮を調査質問紙に明記した．収集したデータは研究公表後 3 年間経過後に

適切に破棄する．この調査は鈴鹿大学倫理委員会の承認を受けている．（承認番号 2022-006）

4.1.2. 調査対象及び有効回答数

三重県内A市及びB市の小学校．A市19校，B市49校の校長及び1年生担任（各学校1名）．

有効回答数はA市19校，B市40校．

4.1.3. 調査時期

令和4年7月～8月（令和4年度1学期を振り返る内容として実施）

4.1.4. 調査項目

○29項目（別表1）：校長14項目，1年生担任15項目（それぞれ回答する項目は別表中に記載）

「はい」「どちらかといえばはい」「どちらかといえばいいいえ」「いいえ」の4件法で回答．

○校長と1年生担任それぞれに自由記述．

校長「学校経営上，上記以外で工夫されていること等がありましたら，お書きください．」

1年生担任「１年生の指導に当たり，上記以外で工夫されていること等がありましたら，お書きください．」

29項目の内28項目は，令和2年7月大分県教育庁義務教育課作成の冊子「子どもの育ちと学びをつなぐスタートカリキュラムをデザインしよう!!」[4]の参考資料「スタートカリキュラムのチェックリスト」28項目をそのまま引用し，29項目目を追加した．

大分県の資料から引用した項目のうち27項目は，国立教育政策研究所「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」[5]の内容を踏まえ，「デザイン」領域，「実践」領域，「マネジメント」領域の各9項目で構成されている．

調査項目の集計において点数化が必要な場合は，4件法による各項目について，「はい」＝4点，「どちらかといえばはい」＝3点，「どちらかといえばいいえ」＝2点，「いいえ」＝1点と点数化した．

4.1.5. 「デザイン」領域，「実践」領域，「マネジメント」領域

「デザイン」領域は，スタートカリキュラムを編成する計画段階を指す．①幼児の発達や学びを理解する，②期待する児童の姿を共有する，③単元の構成と配列を見直す，④週の計画や時間配分を見直す，といった内容である．

「実践」領域は，生活科を中心に他教科との合科的・関連的な指導を通して児童が自覚的な学びに向かう学習活動や小学校生活に慣れていくための支援活動である．

「マネジメント」領域は，スタートカリキュラムの質の向上を目指す活動であり，校内組織の立ち上げ，全校での協力体制，情報の共有，検証・改善活動である．

4.1.6. 調査結果

4.1.6.1. スタートカリキュラムの作成状況

A市とB市におけるスタートカリキュラムの作成状況は表2のとおりである．

A市では全小学校が作成し，B市では「はい」「どちらかといえばはい」が，合わせて25校（約65．8%）である．

表２ A市とB市におけるスタートカリキュラムの作成状況

スタートカリキュラム（またはそれに類似のもの）を作成している					
	A市			B市	
	学校数	割合		学校数	割合
はい	19	100.0%		8	20.0%
どちらかといえばはい	0	0.0%		17	42.5%
どちらかといえばいいいえ	0	0.0%		9	22.5%
いいえ	0	0.0%		4	10.0%
無回答	0	0.0%		2	5.0%

4.1.6.2. 「デザイン」「実践」「マネジメント」の3領域について

「デザイン」「実践」「マネジメント」の3領域について，4件法の回答を点数化（4点満点・小数第2位で四捨五入）した．A市・B市のそれぞれ全体の平均値は，表3・図1のとおりである．

表３ A市・B市全体の３領域の状況

	A市	B市
「デザイン」領域	3.5	3.1
「実践」領域	3.3	3.3
「マネジメント」領域	3.1	2.7

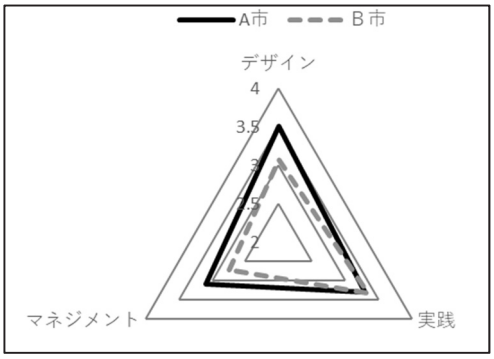

図1 A市・B市全体の3領域のチャート図

概ね，A市では【　デザイン＞実践＞マネジメント　】であり，B市では【　実践＞デザイン＞マネジメント】であり，いずれの市も他の領域に比べて「マネジメント」領域に課題がある傾向がみられる．

4.1.6.3.　スタートカリキュラムに対する教員の理解と実施体制

スタートカリキュラムを編成･実施するにあたって，PDCA サイクルの中で教員が共通理解し，協力体制を取り実施し，その状況を把握し，よりよい方向に改善を図っていくという一連の活動は，高い実践効果を得るために重要なことである．このことに関連する，次の項目相互の関係について，A 市・B 市の状況をまとめた．

まず，項目 1（「デザイン」領域）と項目 23（「マネジメント」領域）の関係について，A 市・B 市の状況は次のとおりである．（表 6，7）

項目	内容
1	学習指導要領における「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解している．（回答：校長）
23	スタートカリキュラムを全教職員で協力体制を組み，実施している．（回答：校長）

表 6　A 市の項目 1 と 23 の相互の関係

A市		学習指導要領における「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解している。	
		はい どちらかといえばはい	いいえ どちらかといえばいいえ
スタートカリキュラムを全教職員で協力体制を組み、実施している。	はい どちらかといえばはい	18	0
	いいえ どちらかといえばいいえ	1	0

表 7　B 市の項目 1 と 23 の相互の関係

B市		学習指導要領における「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解している。	
		はい どちらかといえばはい	いいえ どちらかといえばいいえ
スタートカリキュラムを全教職員で協力体制を組み、実施している。	はい どちらかといえばはい	20	6
	いいえ どちらかといえばいいえ	5	9

A市では，1校を除いて18校で「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解し，かつ全教職員で協力体制を組み実施している状況である．

B市では，半数の20校で「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解し，かつ全教職員で協力体制を組み実施している．また，5校は「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解していても，全教職員で協力体制を組んで実施できていない．6校は「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解しないが協力体制を組み実施している．さらに，9校では「スタートカリキュラム」の位置付けを教員の理解ができておらず，かつ協力体制を組んで実施できていない状況である．

次に項目1（「デザイン」領域）と項目24（「マネジメント」領域）の関係について，A市・B市の状況は次のとおりである．（表8，9）

項目	内容
1	学習指導要領における「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解している．（回答：校長）
24	スタートカリキュラムの実施状況を全教職員で共有している．（回答：校長）

表 8　A 市の項目 1 と 24 の相互の関係

A市		学習指導要領における「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解している。	
		はい どちらかといえばはい	いいえ どちらかといえばいいえ
スタートカリキュラムの実施状況を全教職員で共有している。	はい どちらかといえばはい	17	0
	いいえ どちらかといえばいいえ	2	0

表 9　B 市の項目 1 と 24 の相互の関係

B市		学習指導要領における「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解している。	
		はい どちらかといえばはい	いいえ どちらかといえばいいえ
スタートカリキュラムの実施状況を全教職員で共有している。	はい どちらかといえばはい	20	2
	いいえ どちらかといえばいいえ	5	13

A市では，すべての学校で「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解し，かつ2校を除いて実施状

況を全教職員で共有している．

B市では，20校で位置付けを教員が理解し実施状況を全教職員で共有しており，5校は教員が理解しているが実施状況を全教職員で共有できていない．2校は実施状況を全教職員で共有しているが位置付けを教員が理解していない．13校は位置づけも実施状況も教員が理解できていない．

4.1.6.4. 幼児教育現場との相互理解の方法

幼稚園等教職員と小学校教職員の交流やそれぞれの教育に対する相互理解は，接続期のカリキュラムの実施においては大変有効なことである．

そこで，次の項目（いずれも「マネジメント」領域）相互の関係について，A 市・B 市の状況をまとめた．項目 21 と項目 25 について，A 市・B 市の状況は次のとおりである．（表 10，11）

項目	内容
21	幼稚園等に訪問し，幼児や保育の様子を参観し，小学校での指導に生かしている．（回答：校長）
25	幼稚園等の教職員や保護者に，スタートカリキュラム実施時期の様子を参観してもらっている．(回答：校長)

表 10　A 市の項目 21 と 25 の相互の関係

A市		幼稚園等に訪問し、幼児や保育の様子を参観し、小学校での指導に生かしている。	
		はい どちらかといえばはい	いいえ どちらかといえばいいえ
幼稚園等の教職員や保護者に、スタートカリキュラム実施時期の様子を参観してもらっている。	はい どちらかといえばはい	17	1
	いいえ どちらかといえばいいえ	1	0

表 11　B 市の項目 21 と 25 の相互の関係

B市		幼稚園等に訪問し、幼児や保育の様子を参観し、小学校での指導に生かしている。	
		はい どちらかといえばはい	いいえ どちらかといえばいいえ
幼稚園等の教職員や保護者に、スタートカリキュラム実施時期の様子を参観してもらっている。	はい どちらかといえばはい	19	0
	いいえ どちらかといえばいいえ	21	0

A市では，2校を除く17校で小学校教職員が幼稚園等を参観し小学校の指導に生かしており，幼稚園等の教職員や保護者にスタートカリキュラム実施時期の様子を参観してもらっている．

B市では，すべての学校で小学校教職員が幼稚園等を参観し小学校の指導に生かしているが，幼稚園等の教職員や保護者にスタートカリキュラム実施時期の様子を参観してもらっている学校は約半数である．

これらから，A市では，幼稚園等教員と小学校の教員との相互の参観・交流が，市全体で的確に行われていると考えられる．【以上，伊東】

4.2. A 市におけるスタートカリキュラムに基づいた実践

前述のとおり，A市では，教育委員会が関与して各学校でスタートカリキュラムを編成しそれに基づく実践を行っている．

幼保小の各学校区でカリキュラムを編成する際に，次の手順で教育委員会が指導し編成を進めている．

「アプローチ期(5歳児10～3月)のカリキュラムのためのワークシート」（参考資料図1）「スタート期(1年生4～7月)のカリキュラムのためのワークシート」（参考資料図2）を用いて以下の内容について，幼稚園等教職員と小学校教職員が協働で検討・記入していく．

①「アプローチ期・スタート期にめざす子ども像」
②「アプローチ期・スタート期の保育・教育で大切にしたい視点」
③「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の項目に沿った幼稚園等・小学校における活動内容

このワークシートに基づきながら，保幼小接続カリキュラムを編成する．教育委員会がモデル（参考資料図3））を例示[3]し，それを土台に各学校区で編成する．

このような取組が行われているA市の小学校の事例を取り上げる．

取り上げる事例として，本研究の仮説に対して特徴的な実践が行われているA校，F校，H校における事例を基に検証を行う．

4.2.1. 実践事例（A 校）

第 1 事例として，平成 31 年度からの教育委員会の取組に沿って幼保小の接続・連携に取り組んできた小学校であるA 校を取り上げる．

3 カリキュラム作成用の様式を 2 種類準備し，学校によって選択できるようにしている．

4.2.1.1. A 校がスタートカリキュラム編成を行う背景

A校の令和4年度の1年生は104名（4クラス）である．A校ではこれまで，いわゆる小1プロブレムの状況が見られた．そこで,「低学年では教育活動に向かうための土台（基礎）から築いていくべきだ.」「数値等で示すことができる能力と併せて数値等では示すことができない『忍耐力』『社会性』などの能力（非認知能力）を育むことが重要である.」と考え，A校では全職員でスタートカリキュラムに取り組んできた．

4.2.1.2. 授業の改善と教職員の意識改革

1つ目の特徴は「スタートカリキュラムにおける授業改善として特にこだわりたいこと」として，次の4点を挙げていることである．

①「授業のタイムマネジメントを，15分×3の区切りで計画を立てる」

②「保育所・幼稚園の活動の延長線上の活動を取り入れる」

③「『飽きる』まで継続して取り組む（遊ばせる）」

④「体を動かす運動・遊びを充実させる」

2つ目は「スタートカリキュラムは入学時の1年生にとってのみ有効なのではなく，どの学年にとっても大切な視点である」と捉え，1年担任に限らず全職員で共通理解による意識改革を図り，実践していることである．そこで，小学校教職員が幼児期から児童期への発達や「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の理解を深め，教職員間で共有することを目的として，保育参観や「保幼小連絡会」を実施している．令和4年度は夏季休業中に保育参観を行い，園長や教職員・保育士から，10の姿を視点とした幼児期の学びの見取りについて研修を行っている．新規採用教職員には，異校種連携研修を利用して，実際に保育所で保育に参加させている．

3つ目は，A校には15を超える保育所・幼稚園・認定こども園から児童が就学するが，6月に「保幼小連絡会」を実施し，すべての保育所・幼稚園・認定こども園から教職員・保育士が参加し，10の姿を視点とした資質・能力の発揮や成長の様子を確認するために授業参観を行い，その後，意見交流を行う．このほかにも年長児の担任と1年生担任は，市の「保幼小接続・連携研修会」で，写真や動画，児童の作品を持ち寄り，具体的なエピソードを交えて話し合い，相互理解をしている．

4.2.1.3. 環境構成の工夫

A校では児童の主体性を育むため保育所・幼稚園の環境構成を取り入れ，児童が安心して過ごすことのできる場所や空間を設定している．

まず,「DEN」[4]と呼ぶスペースが各階にある．階段下の2帖ほどの広さに絨毯が敷かれ，絵本やカプラ[5]が置かれている．このスペースは秘密基地のようなワクワク感と，個室的な安心感が得られることを意図し，少し隠れた場所に配置されている．

カプラは「保幼小接続カリキュラム」を作成する中で，多くの保育所で取り入れられており，A校では小学校教育において「数える」「形を作る」「量を比べる」など様々な経験が教科学習に活かしやすいと考え，各クラス分準備している．

写真1　1年生専用の砂場で遊ぶ児童

次に，令和4年度に1年生専用砂場（写真1）を設置した．もともとは栽培活動用の学級花壇があったところに砂を入れて砂場に作り変えたものである．砂場遊びでは，限られた場所と道具の取り合いがおきるなどの葛藤場面が生まれる．その葛藤場面を通して「道徳性」が育まれ，砂場遊びで育まれる非認知能力に着目していくことを，校長が校区の保育所・幼稚園を訪ねる中で気づき，設置したものである．

さらにA校には「10の姿」の「自然との関わり・生命尊重」からのつながりを踏まえ，校庭だけでなく，校舎で囲まれた中庭に樹木の植栽や池など身近に自然

4 英語で「巣・穴・ねぐら・ほら穴・隠れ家」の意味　5 KAPLA ブロック：木製ブロック

を感じられる環境が整えられている．

4.2.2. 実践事例（F 校）

第2事例として隣接する保育所から就学する児童が大半を占め，これまでも「保小連絡会」等年間を通して様々な形で交流が盛んにおこなわれてきた．そこから「幼児期の学び」とのつながる「小学校での学び」を重要視し，入学後の児童の姿の変化が顕著であったF校を取り上げる．

4.2.2.1. F校における実践の背景

F校の令和4年度の1年生は15名で2名を除いて全員が隣接する保育所出身である．

児童の中に，日本語指導が必要な児童が2名いる．母語がベトナム語の児童C児と，母語がポルトガル語の児童D児である．この2名に対してスタートカリキュラムを踏まえながら「繰り返しを用いた指導」と少しずつ活動内容のレベルを上げていく「スモール・ステップ」による指導を行うこと，併せて幼児期の保育環境とつながりをもたせた教室環境を作ることで，すべての児童は安心して学びを高めるであろうと考え実践がなされた．

4.2.2.2. 幼児期の学びとつながる授業づくり

1年生の担任は隣接する保育所に何度も訪ね，年長児の担任ともすぐに連絡を取り合える関係を築いてきた．年長児に好きだった絵本を算数の時間に使って児童の興味関心を引くなど，幼児期の経験につながる活動を取り入れながら学ぶことを実践している．

さらにC児D児をはじめすべての児童が授業に意欲的に参加できるような指導方法の工夫を行っている．

算数科の『おなじかずのなかまをさがそう』（4月）の授業実践記録である．

【授業記録】（一部抜粋）T:教師，C:児童

T:「習った数字を読んでみようか.」

C:「1，2，3，4，5，6，7」

T:「すばらしい．では歌にして読んでみよう.」

C:「（7step の歌に合わせて読む）♪1，2，3，4，5，6，7・・・.」

T:「すごい！上手です．今日は，みんなにカードを作ってきました．うらをむけて配るからそっと見て隠してね．他の子に見られないようにそっとね.」

C:「なにやろ.」

C:「ワクワクする.」

（教師が全員に一枚ずつカードを裏向けて配る．児童はそっと自分だけ見る.）

T:「さあ，そこに描かれた絵は何がいくついるかな．わかったらこの前の数字のところに貼りにくるよ.」

C:（つぶやき）「きりんや．きりんって一頭って数えるのかな.」

T:「まず，先生がやってみるね．みんなも一緒に考えてね．車が，1，2，3 かな．3 台あります.」（絵カードを 3 のカードの下へ貼る）「どうですか.」

C:「合っています.」

C:「ぼくもやりたい.」（C児）

T:「では，やってみましょう．だれから発表しますか.」

C:「はい.」（挙手多数）

児童は5までの数を学習し，本時で展開される活動と同じ活動をすでに経験している．前時には7までの数を学習し，もう一度7までの数で同じ活動を繰り返し，「スモール・ステップ」による指導となっている．

本時では，絵カードを裏返して他者に見せないように配ることで，他の児童の絵カードが何か，数字は何か，といったクイズ的な要素を含ませている．また，声を出して読む，歌にして読む，先生の見本を見ることで見通しをもつ，席を立ってもよい場面を設定するといった工夫がある．「同じ活動を繰り返す」「スモール・ステップで進める」ことで，児童は戸惑うことなく活動できる．

この授業では，C児D児も含め，すべての児童の集中が途切れることはなく学習に取り組めた．

4.2.2.3. 保育所等とつながる教室環境

1年生の教室には季節の花が生けられている．F校と接続する保育所では教室に必ず草花があり，生き物が飼育されていた．小学校でも保育所とのつながりをもたせるための環境を整えた．虫の飼育箱をおき，児童たちが休み時間に校庭で捕まえた虫や家から持ってきた虫を大切に飼育している．

また，絵本の置き方（写真 2）にも工夫が見られる．児童の目線の高さに合わせ，いくつかは表紙が見える

状態にして置かれている．季節に合わせた絵本や，国語の授業で学習している物語（『おむすびころりん』や『大きなかぶ』など）が置かれており，そこに置かれている本から読み聞かせをする．4 月当初の児童はまだひらがながすらすら読めない児童もいる．そこで，F 校では朝の時間に絵本や紙芝居の読み聞かせを行っている．児童は保育所の時のように，教員が読み聞かせをする絵本や紙芝居を毎朝楽しみに聴いている．

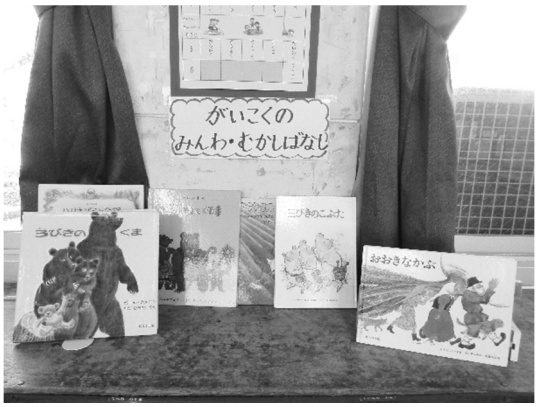

写真 2　表紙が見えるように置かれた絵

さらに，この学級では教室に話を聴くときのポイントを示した「ききかためいじん あいうえお」という掲示物がある．隣接保育所の保育士の希望により，保育所でも環境構成にこれを加え，「聴き合う」活動に取り組んでいる．幼児期から，「あ：相手の顔を見て，い：いい姿勢で，う：うなずき，え：笑顔で反応しながら，お：おわりまで聴く」ことを続け「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の「言葉による伝え合い」を土台とした幼児教育での「聴き合う」活動が環境を通して小学校教育へと接続されている．

4.2.3.　実践事例（H 校）

第3事例として，中学校区人権・同和教育推進協議会の活動として人権教育カリキュラムの交流を通して接続期のカリキュラムの作成より前から保育所との接点が保たれてきたH 校を取り上げる．

4.2.3.1.　H 校における幼児教育と小学校教育接続の背景

H校では，令和4年度1年生が6名で，5名が隣接する保育所からの就学である．隣接する保育所は，学校裏のフェンスを越えてすぐという，立地的に小学校と近い場所にある．ところが，これまで，隣接しているにも関わらず，児童同士の交流や教職員の交流はほとんどされていない状況であった．

中学校区人権・同和教育推進協議会の学校人権・同和教育部会では，各学校・園が作成した人権教育カリキュラムについての話し合いは，保育所の園長や小，中学校の校長が中心となって話し合うだけで終わっていた．小学校教職員と保育士がカリキュラムについて話し合う場はなく，入学前の事務的な引継ぎが行われているだけであった．

4.2.3.2.　スタートカリキュラムによる指導方法の工夫・改善

担任はスタートカリキュラムを踏まえ教室の環境構成だけでなく，授業中の児童への話し方，児童への対応の仕方など，幼児教育を意識した取組を行った． 担任は児童がよいスタートを切ることができるよう令和3 年度に編成した『保幼小接続カリキュラム』を参考にして取組を進めた．カリキュラムがあることで，「保育所でどのような活動をしてきたのか」「10 の姿に向けてどのような遊びをさせてもらってきたのか」を確認することができ，さらに必要な場合は保育所に直接確認した．

「保幼小接続カリキュラム」を保育士と協働で編成することにより保育士と小学校教職員が話し合う機会が十分にもて，児童の様子や，遊びの様子などを普段から聞き合える関係を築いていくことができるようになった．【以上：大垣内】

5.　考察

5.1.　教育委員会の関与によるスタートカリキュラムの編成及び理解の進捗について

スタートカリキュラムの編成と指導に係る調査結果では，A市では全学校がスタートカリキュラムを編成するとともに校区の幼稚園等におけるアプローチカリキュラムとの接続が図られている．一方，B市でも40校中25校でスタートカリキュラムが作成されているが，アプローチカリキュラムとの接続が図られているかどうかは不明である．

「デザイン」「実践」「マネジメント」の3領域について，教育委員会の関与があるA市では，「マネジメント」領域（校内組織の立ち上げ，全校協力体制，情報の共有，検証改善活動等）でやや課題がある傾向とみ

ることができる．「デザイン」領域の「スタートカリキュラムの位置づけを教員が理解している」では，A市では全学校でそれができている状況である．これは，接続期カリキュラムの編成を行うにあたって，各学校区で幼稚園等教職員と小学校教職員が話し合い，それを１年生だけではなく他学年の担当教員にも理解を図るよう教育委員会が指導・助言してきたことの成果ではないだろうか．さらに，「マネジメント」領域の「小学校教職員の幼稚園等への訪問と参観」「幼稚園等教職員の小学校の参観」もA市では19校中17校で両方行われており，職員間の相互交流や教育内容の相互理解が進められているとみられる．B市においてもすべての学校で小学校教職員が幼稚園等を訪問しており，40校中19校で幼稚園等の教職員が小学校の参観を行っている．ただ，両市の違いは接続期のカリキュラムの活用である．A市では相互に話し合ってカリキュラムを編成しており，訪問や参観時にこのカリキュラムが活用されていると考えられる．

また，A校の事例では，校長のリーダーシップの下，次のような取組が行われている．

①授業改善に係る取組方針の明確化
②全教職員の理解と協力体制の構築
③幼稚園等教職員への早期の授業公開

これらは，教育委員会の方針を理解し，その指導助言を得ながら行われてきた成果ととらえたい．

このようにみてくると，教育委員会が指導助言などの関与をすることで，自治体全体としてスタートカリキュラムの編成及び理解がより進むと考えられる．

5.2. スタートカリキュラムの編成により得られる児童の安心感

スタートカリキュラムを幼稚園等教職員と協働で編成することで，幼児教育の場でどのような環境構成がなされているのかについて小学校教職員の理解が進む．さらに,相互交流において特に小学校教職員が幼稚園等を訪問することで，幼稚園等の教育方法や環境構成をスタートカリキュラムに反映させ，教育実践として生かしていこうという試みがなされている．

A校では「DEN」「砂場」という環境が設定された．F校では「花」「生き物」という環境や絵本の配置がされた．

中でもA校が取り入れた「砂場」の実践はその好例であるといえるであろう．砂場は，どの小学校でも運動場に設置されている．A校は，運動場とは別に１年生の教室のすぐ横に設置した．砂場は，石井が「子どもたちの心に安定感を与える空間」「緊張感のやわらいだ空間」[6]と考察しているように，「子どもに安心感を与える空間」になったと考えられる．『スタートカリキュラムスタートブック』[7]では「幼児期に親しんだ活動を取り入れたり，分かりやすく学びやすい環境づくりをしたりすることで，子供は安心して小学校での生活をスタートすることができます.」と子どもの安心感は「幼児期に親しんだ活動」「分かりやすく学びやすい環境づくり」によって生まれてくると述べており，A市での学校の取組はそれを踏まえた実践を行っているといえる．

A校やF校の事例では児童は落ち着いて小学校生活に移行しており，スタートカリキュラムを編成しそれに基づいた指導を展開することで，児童は安心感の中で落ち着いた生活や学習ができるといえるのではないか．

5.3. スタートカリキュラムの編成による学びの連続性を踏まえた指導方法の改善

A校では指導方法として，①15分×3のモジュール，②幼児期の活動の延長線上の活動，③「飽きるまで」の継続した活動，④体を使う活動に重点を置くとし，幼児期の学びと接続させ児童が授業に集中して取り組めるようにしていた．

F校では，年長児の時に好きだった絵本を算数の授業時間に取り入れ，児童の興味関心を高めていた．さらに，掲示物「ききかためいじん　あいうえお」を接続する保育所と小学校の両方で掲示しており，保育所で取り組んでいたことがそのまま小学校でも継続して取り組めるようにしていた．

H校では編成した『保幼小接続カリキュラム』を参考にして「保育所でどのような活動をしてきたのか」「10の姿に向けてどのような遊びをさせてもらってきたのか」を確認しながら取組を進めた．

これらの取組ができているのは，幼児期の学びについて小学校教職員が幼稚園等教職員と共通理解をして，スタートカリキュラムの取組を行ってきたからであり，スタートカリキュラムを編成しそれに基づいた指導を展開することで，学びの連続性を踏まえた指導方法の改善が行われるといえる．

6. おわりに

『スタートカリキュラムスタートブック』[7] では，「幼児教育の考え方を取り入れることで，子供に安心感が生まれます.」「幼児期の経験を小学校の学習につなぐと，子供が自信をもち，成長していきます.」「スタートカリキュラムを入り口として６年間を見通すことが， 子供の自立につながります.」と述べられている．本研究では,「教育委員会の関与によるスタートカリキュラム編成」, またその効果としての「安心感」「学びの連続性」に視点を当てたが,「6年間の見通し」という点では，検証できなかった．しかし，A校では「１年生にとってのみ有効なのではなく，どの学年にとっても大切な視点である」ととらえており，小学校6年間を見通すカリキュラムという捉え方をしている．

このような捉えができるかどうかはカリキュラムマネジメントができているかどうかである．A校の取組から，トップリーダーである校長の意識の重要性が示唆される．校長が教育委員会の指導や助言を踏まえながらカリキュラムマネジメントを行っていくことで，入学した児童の「安心」「成長」「自信」につながり，さらに全学年を見通したカリキュラム編成となっていく．

スタートカリキュラムを1年生の担任や関係教員だけに任せるのではなく，学校全体の共通理解や協力体制，検証改善が求められる．このような学校体制の確立を可能にするのは，教育委員会による適切な関与が重要であろう．

一方，本研究ではB市について具体的な実践に触れることができなかったが, 今後, B市において接続期のカリキュラムとして編成が進められ，多様な実践が生み出されるであろうと考えられる．今後の研究課題としてB市におけるカリキュラム編成の在り方やそれに基づく実践事例について注視していきたい．

【以上，伊東】

引用文献

1)中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会(2021)：幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt_youji-000021702_3.pdf（最終アクセス2022.9.18）

2)中央教育審議会（2015）：幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）中教審第197号p. 76, 156 https://www.mext.go.jp/B_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/Afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf （最終アクセス2022.9.18）

3)三重県教育委員会(2018)：三重県保幼小の円滑な接続のための手引き（2020年3月改訂）

4)大分県教育庁義務教育課（2020）：つないでる？子どもの育ちと学び～幼小の円滑な接続を目指して～子どもの育ちと学びをつなぐスタートカリキュラムをデザインしよう

5)文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2018)：発達や学びをつなぐスタートカリキュラム，学事出版

6）石井光恵（1990）：幼稚園における砂遊びに関する一考察 日本女子大学紀要（家政学部）37．pp．17－22

7)文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2015)：スタートカリキュラムの編成の仕方・進め方が分かるスタートカリキュラムスタートブック https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf?time=1423123582117 （最終アクセス2022．12．18）

執筆者(主筆)の所属と連絡先
鈴鹿大学こども教育学部
Email: n-ito@suzuka.ac.jp

参考資料

別表1　「小学校入学時における児童の指導について」の調査項目

番号	領域	項目	回答者	
1	デザイン	学習指導要領における「スタートカリキュラム」の位置付けを教員が理解している。	校長	大分県教育庁「子どもの育ちと学びをつなぐスタートカリキュラムをデザインしよう！！」の「スタートカリキュラムのチェックリスト」28項目
2		入学してくる子どもたちの幼児期の実態を教員が把握している。	校長	
3		「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を学校全体で共通理解している。	校長	
4		スタートカリキュラム（またはそれと類似のもの）で期待する児童の姿を明確にしている。	校長	
5		生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫を行っている。	1年担任	
6		全ての単元を配列し俯瞰する単元配列表を作成している。	1年担任	
7		スタートカリキュラム（またはそれと類似のもの）の単元計画に基づいて週の計画を作成している。	1年担任	
8		弾力的な時間割の工夫をしている（短い時間、ゆったりとした時間）。	1年担任	
9		入学後の１日の学校生活を、児童中心にデザインしている。	1年担任	
10	実践	具体的な活動や体験を通して、生活上必要な習慣や技能が身に付くよう指導している。	1年担任	
11		子ども一人一人の経験の違いや園での活動の違いに留意して、体験活動を取り入れている。	1年担任	
12		友達と触れ合ったり関わり合ったりするゲーム等、幼児期に親しんだ活動を取り入れている。	1年担任	
13		教科学習の内容（単元）につながる幼児期の姿を意識して学習活動を展開している。	1年担任	
14		学習活動に際して、児童が主体的に自己を発揮できる場面を意図的につくっている。	1年担任	
15		子どもが安心感をもち、新しい人間関係を築くために、遊びや活動の特性を考慮している。	1年担任	
16		１時間の中での遊びや活動の構成を考えて実践している。	1年担任	
17		１週間の中での遊びや活動の連続性、発展性を考えて実践している。	1年担任	
18		園と小学校の環境の違いに配慮し、掲示物や人的な環境構成を工夫している。	1年担任	
19	マネジメント	スタートカリキュラム（またはそれと類似のもの）の意義や考え方、ねらいなどを全教職員で共通理解している。	校長	
20		スタートカリキュラム（またはそれと類似のもの）の意義やねらいを、保護者に説明している。	校長	
21		幼稚園等に訪問し、幼児や保育の様子を参観し、小学校での指導に生かしている。	校長	
22		幼稚園等の教職員と意見交換を行い、幼児の実態を把握しようとしている。	校長	
23		スタートカリキュラム（またはそれと類似のもの）を全教職員で協力体制を組み、実施している。	校長	
24		スタートカリキュラム（またはそれと類似のもの）の実施状況を全教職員で共有している。	校長	
25		幼稚園等の教職員や保護者に、スタートカリキュラム（またはそれと類似のもの）実施時期の様子を参観してもらっている。注）covid-19対策で実施できなかった場合もそのままお答えください。	校長	
26		毎週末や毎月の節目等に、スタートカリキュラム（またはそれと類似のもの）の反省、検証、改善を行っている。注)校長先生等が授業や活動を参観したり、口頭で確認したりして確認し、改善等を行っている場合も含みます。	校長	
27		週案等の資料をデータベース化し共有している。	校長	
28	その他	スタートカリキュラム（またはそれと類似のもの）の実施時期はどの程度ですか。	1年担任	
29	その他	スタートカリキュラム（またはそれと類似のもの）を作成している。	校長	

1～28が，大分県教育庁義務教育課作成の冊子「子どもの育ちと学びをつなぐスタートカリキュラムをデザインしよう!!」の参考資料「スタートカリキュラムのチェックリスト」から引用した項目．「デザイン領域」「実践領域」「マネジメント領域」各9項目で構成されており，3領域での分析ができる．下線部分は今回の調査で加筆した．「スタートカリキュラム（またはそれと類似のもの）」は，B市においては，教育委員会の指導助言を得ながらスタートカリキュラムを編成されている状況ではないため，「類似のもの」も含め回答を求めた．「類似のもの」とは，例えば，週案に基づき，学年だより等で1週間の時間割と学習内容を示したものなどがある．

アプローチ期（5歳児10～3月）のカリキュラムのためのワークシート　園・所名（　　）
記入者名（　　）

アプローチ期にめざす子ども像	・自分の思いや考えを自分の言葉で伝えることができる。 ・集団の中での所属意識を持ち，貢献することに喜びを感じることができる。 ・新しいことに積極的にチャレンジし，最後までやり抜くことができる。
アプローチ期の保育で大切にしたい視点	・思いや考えを表現しやすい場をつくり，一人一人に表現する機会を保障する。 ・大人の手を借りずに自分たちで計画したり，問題を解決したりする機会を保障する。 ・早急に成長を求めず，一人一人の違いや良さを認め励ましながら，独力でやり抜く機会を保障する。

健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活とのかかわり
・マラソン ・縄跳び ・一輪車	・当番・グループ活動 ・掃除・後片付け ・食事の準備・配膳	・毎日の遊び・活動のふりかえり ・生活発表会	・遊びのルールや作戦を決める話し合い ・当番・グループ活動	・お店屋さんごっこ ・秋の遠足 ・異年齢活動
思考力の芽生え	**自然とのかかわり・生命尊重**	**数量・図形，文字等への関心・感覚**	**言葉による伝えあい**	**豊かな感性と表現**
・コマ回し ・どろだんごづくり ・氷づくり ・砂場遊び	・いも掘り ・めだかの飼育 ・散歩 ・畑の水やり ・うさぎのえさやり	・粘土遊び ・いもの数を数える ・お店屋さんの看板やチケットづくり	・生活発表会でやりたいことの話し合い ・毎日の遊び・活動のふりかえり	・落ち葉アート ・いものつるを使ったリースづくり ・絵本の読み聞かせ

1

参考資料　図１　アプローチ期のカリキュラムのためのワークシート

スタート期（1年生４～7月）のカリキュラムのためのワークシート　小学校名（　　）
記入者名（　　）

スタート期にめざす子ども像	・一人一人が安心感をもち，新しい人間関係を築くことができる。 ・学習や学校生活での課題に自ら取り組もうとすることができる。 ・学校のきまりを理解し，自分で善悪を判断しながら行動することができる。
スタート期の教育で大切にしたい視点	・保育園・幼稚園で親しんできた遊びや経験を学校生活に取り入れ安心して学校生活が送れるようにする。 ・１５分程度のモジュールで時間割を構成し，体験的な活動を意識的に入れていく。 ・早急に成長を求めず，一人一人の違いや良さを認め励ましながら，段階的に小学校生活に慣れていけるようにする。

健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活とのかかわり
・かけっこ（５０m） ・リレー ・的当て	・当番・グループ活動 ・掃除・後片付け ・給食の準備・配膳	・グループ活動 ・運動会（ダンス） ・学習発表会	・遊びのルールや作戦を決める話し合い ・当番・グループ活動	・春みつけ ・春の遠足 ・つうがくろ
思考力の芽生え	**自然とのかかわり・生命尊重**	**数量・図形，文字等への関心・感覚**	**言葉による伝えあい**	**豊かな感性と表現**
・あそぼう　まなぼう ・みのまわりのあんぜん（生活科） ・学校探検	・朝顔の栽培 ・めだかの飼育 ・春の生き物探し	・「いくつといくつ」 ・「なかまづくりとかず」（算数科）	・学級会での話し合い ・毎日の学習・活動のふりかえり	・好きなものの絵 ・しゃぼんだまあそび ・絵本の読み聞かせ

2

参考資料　図２　スタート期のカリキュラムのためのワークシート

伊東　直人　大垣内　亜紀　「スタートカリキュラム」を活用した小学校入学時の指導と効果

参考資料　図３　A市教育委員会が作成した保幼小接続カリキュラムのモデル

保幼小接続期カリキュラム　A市立（　　）小学校区保育所（園）・幼稚園　【様式２】　２０２２（令和４）年１０月～２０２３（令和５）年７月　記入者（　　）

・自分の思いや考えを自分の言葉で伝えることができる。 ・集団の中で所属意識をもち、貢献することに喜びを感じることができる。 ・新しいことに積極的にチャレンジし、最後までやりぬくことができる。	めざす子ども像	・一人一人が安心感をもち、新しい人間関係を築くことができる。 ・学習や学校生活での課題を自ら取り組もうとすることができる。 ・学校のきまりを理解し、自分で善悪を判断しながら行動することができる。
・思いや考えを表現しやすい場をつくり、一人一人に表現する機会を保障する。 ・大人の手を借りずに自分たちで計画したり、問題を解決したりする機会を保障する。 ・早急に成長を求めず、一人一人の違いや良さを認め励ましながら、独力でやりぬく機会を保障する。	大切にしたい視点	・保育園・幼稚園で親しんできた遊びや経験を学校生活に取り入れ、安心して学校生活が送れるようにする。 ・１５分程度のモジュールで時間割を構成し、体験的な活動を意識的に取り入れる。 ・早急に成長を求めず、一人一人の違いやよさを認め励ましながら行動することができる。。

アプローチカリキュラム　10の姿　スタートカリキュラム

１０月	１１月	１２月	１月	２月	３月	10の姿	４月	５月	６月	７月
にんにんタイム サーキット遊び	ボール投げ	鉄棒	マラソン おしくらまんじゅう	おにごっこ	おにごっこ	健康な心と体	おにごっこ 小学校の校庭の遊具でサーキットトレーニング	５０m走	ドッジボール プール水泳	
当番活動		生活発表会 大きな声で発表する		みんなでつくろう ・卒園に向けて作品づくり	もうすぐ1年生 年中さんをしょうたいしよう	自立心	当番活動 朝の会・帰りの会 学校の1日の流れを知る 学校への登下校を安全に行う	給食当番に挑戦しよう	係活動をしよう	
ままごとあそび	カプラ 大型積み木	生活発表会 みんなで同じ目標に向かって取り組む			ルールのある遊び おにごっこ	協同性	どきどきわくわく1年生（生活科） 給食の準備、食べ方、片付け方 トイレ、靴箱の使い方	学校たんけん みんなで協力して探検する	校区探検をしよう	おむすびころりんのげきをしよう
		生活発表会 「どうぞのいす」 思いやりの気もも	見学のルールを学ぶ		おにごっこのルールについて	道徳性・規範意識の芽生え	どきどきわくわく1年生（生活科） ○○小学校のきまりを知ろう	学校たんけん たんけんの時のルールを考えよう	校区探検をしよう 交通ルールを守る	全校集会
遠足 散歩 地域の方との交流	避難訓練		消防署見学			社会生活との関わり	どきどきわくわく1年生（生活科） 親創り班活動	学校たんけん 学校の先生とあいさつしよう	校区探検をしよう 校区を知る	もうすぐ夏休み 夏休みのルール
			伝承あそび おてだま けんだま こままわし	遊び方を工夫する 難しい技へ挑戦する		思考力の芽生え		学校たんけん 行ってみたいところ、聞きたいことを考えよう	校区探検をしよう	
さつまいもほり	どんぐりあそび	昆虫の飼育 図鑑で調べる	こおり・雪遊び 寒い日のあそび			自然との関わり・生命尊重	春みつけ	あさがおを育てよう（生活科） たねのかんさつ 形、大きさ、色、などを観察して書こう	あさがおのかんさつ 夏みつけ	あさがおのかんさつ あさがおで色水つくり
さつまいもほり 収穫したさつまいもを数える 大きさを比べる	どんぐりあそび どんぐりをかぞえる 大きさ、形をくらべる	しりとり なぞなぞ		かるたあそび ひらがなに興味をもたせる 「あいうえおうさま」	かるたあそび 読めるひらがなを自然にふやす なぞなぞあそび	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	じぶんのなまえをかいてみよう（生活科） 「はじめてかいたなまえ」	名刺交換 ひらがなの学習	あわせていくつ・ふえるといくつ（算数科）	ながさくらべ（算数科） どちらが長いかな ながさをくらべるにはどうすればいいのかな、考えを伝えよう
さつまいもほり さつまいもを食べて感想を伝え合う	どんぐりあそび 気づいたことを友だちと伝え合う	しりとり なぞなぞ		できるようになったことを話し合う	思い出を話し合う なぞなぞあそび	言葉による伝え合い	「すきなものなあに」（国語科） ともだちに自分の好きなものやすきなことを絵と言葉で伝えよう	学校たんけん（生活科） 校長先生へインタビューしよう	インタビューしたことをまとめよう	
	どんぐりあそび どんぐりを使った遊びを考える		氷の作り方を考える			豊かな感性と表現	すきなものの絵を描こう	にこにこおひさま（図工）	「おおきなかぶ」を読んで作品を楽しもう（国語）	「おむすびころりん」音読劇
就学時健診・学校説明会へ参加					小学校の校庭へ散歩（体験）	保幼小連携（子ども）	さつまいもの苗植え（交流1回目）			
保小中交流会	小学校教師が子どもを参観			校区2回での交流会	小学校へ引継	保幼小連携（教職員）	学校通信、入学式などでスタートカリキュラムに向けて周知する。		保小中交流会	夏季休業中に保育所（園）へ参観へ
・月に1度はクラスだよりを出し、子どもの様子を伝える			・就学に向けての生活リズムチェック			家庭との連携	学校通信、入学式などでスタートカリキュラムに向けて周知する。			

同じ活動でも、10の姿の視点によって、ねらいの違いを書きこむことができます。

アプローチカリキュラムとのつながりを意識して組み立てることが大切です。

Education and Effectiveness of the Start Curriculum in Elementary Schools: Through the Verification of the Effect of the Involvement of the Board of Education and the Practical Case

Naoto ITO　Aki OGAITO

Abstract

This paper examines the following: First, whether the "Start Curriculum" facilitates linkage between early childhood education and primary education. Second, what kind of impact will the use of the "Start Curriculum" have on elementary school education? To that end, we will consider: (1) Introduction of the “Start Curriculum” through the involvement of the board of education and the understanding of teachers. (2) Children can learn calmly with guidance based on the "Start Curriculum". (3) Guidance based on the "Start Curriculum" will improve teaching methods. In order to verify these, we will first compare City A and City B, and then collect case studies from City A. This study revealed the following: First, education is maintained and developed in municipalities where the board of education is systematically involved. Second, it is important to create a " Start Curriculum." Thirdly, the "Start Curriculum" has the effect of promoting cooperation and mutual understanding between early childhood education and primary education. And children can learn and grow in a safe environment. In addition, children can continue to learn with confidence.

Keywords

connections between early childhood and elementary education，start curriculum，approach curriculum，elementary school education，education at admission